

中世イングランドにおける修道士と在俗聖職者

山代 宏 道

はじめに

十一・十二世紀イングランドにおいて国王や諸侯の側近としての在俗聖職者達の台頭は、従来指導的役割を果たしてきた修道士達に対するいわば挑戦であった。ノルマン征服後、国王達との関係において注目すべき役割を演じた教会史上の人物としては、共に修道士出身でカンタベリー大司教となったランフランクとアンセルムがいる。これに対し在俗聖職者としてはウィリアム二世に仕えた Ranulf Flambard, bp. of Durham やハーンリー一世に仕えた Roger, bp. of Salisbury があげられる。

本稿では時代を十一世紀末から十二世紀前半に限り、修道士と在俗聖職者が当時置かれていた歴史的状況を把握するため、まず司教位をめぐる両者の対立関係を考察する。さらに国王側近から司教へと任命された在俗聖職者について検討を加える。その際一一二三年カンタベリー大司教選出の過程において在俗聖職者の側に立って重

要な役割を果たしたソールズベリー司教ロジャーに焦点をあてて検討を行うことにより、当時のイングランド教会の実態の一端を明らかにしようとするものである。

一、全般的背景

十一世紀末から十二世紀前半のイングランドにおける、主としてヘンリー一世の治世の終る一一三五年頃までの修道士と在俗聖職者との関係は、数字的に概観してみるとどのようなものであったのであろうか。ウエールズを含めての数字であるが、ウィリアム征服王の時代には一五の司教座が存在していたが、そのうち一〇七〇年における修道士出身司教は三人であった。十二世紀中頃までに司教座は二に増加するが、ウィリアム二世の治世初期一〇九一年頃には修道士出身司教数も五人に増加していた。しかしヘンリー一世治世半ば一一二五年頃にはそうした司教が一人もいなくなった時期もあ

本稿で扱う十二世紀前半の修道院建設については、ヘンリー一世によって一・二三年に建てられたレディング修道院を例外として、それほど大きな修道院の建設はみられない。しかし、それでも一・二〇・三〇年代には少なくとも一八・一九のベネディクト派修道院の建設が認められるのである。

一方なかでも司教座付属の修道院の数は、ノルマン征服後五〇年の間すなわち十二世紀の一〇年代までに四から九へと増加を示している。こうした司教座付属修道院の場合その司教が修道士出身であったか、あるいは在俗聖職者であったかは、修道院との関係によって重大な意味をもっていた。例えば、ウィリアム二世の右腕ともいわれるラヌルフ・フランバルドが一〇九九年司教に即位する以前のダラム司教座においては、修道士出身司教 William of St. Calais が、そこにおける修道院創設に深くかかわっていた。また司教区の組織に関しても、かれの修道士達をそのバートナーとし副修道院長 prior を水統的な司教座聖堂助祭 archdeacon に、あるいはかれの代理としていたのである。

しかし司教座を占める修道士出身者がこの時期相対的に少数であったことは先述したとおりである。一〇九九年にダラム司教となったラヌルフ・フランバルドも国王のチャプレン chaplain 出身であり、後述する Samson, bp. of Worcester (1096—1112) も同じくチャプレンであった。ウィリアム二世は、かれが病氣であった時に押しつけられたアンセルムを除くならば、その治世中に五人の主要な聖職者の任命を行なっている。フランバルドとサムソン以外三名の

うち二名が国王書記長 chancellor 出身者であり、残る一人が修道士出身で一〇九一年ラムゼー修道院長から bp. of Hereford (のちに Norwich) となった Herbert Losinga であった。しかしかれもいわばウィリアム二世の心になつた人物であり、その司教位を買ったといわれるような人物である。

ヘンリー一世治世となつて一〇七七年に Roger of Salisbury が司教となつた時、かれと共に聖別された四名の司教達もまた国王チャペルあるいは書記局 chancery 出身の在俗聖職者であった。一〇〇〇年から一〇〇九年大司教アンセルムの死までの一〇年間に新たに選ばれた九人の司教達のうちただ一人 Ralph of Rochester のみが修道士という状態であった。こうしたかつての国王宮廷関係者が多く司教となつていた背景には国王ヘンリーがアンセルムの教会改革政策を相殺するためかれらを登用したのではないかとする N. F. Cantor の見解が注目される。アンセルム死後宮廷出身司教の割合がいくらか減少している事実を考えあわせるならば、なおさらそうした印象をうけるのである。

こうしたヘンリー一世による宮廷関係者の司教任命に関連してさらに注目されるのは、かれが在位初年に行なつた高位聖職者達の任命である。一〇〇〇年 Earl of Chester の庶子 Robert が abbot of Bury St. Edmunds になり Richard of Clare が abbot of Ely になり William Giffard が bp. of Winchester に任命されている。当時ウィリアム二世の死によって急ぎ即位したヘンリーの王位は、兄であるノルマンディー公ロバートのイングランド侵攻

計画とあいまって非常に不安定なものであった。こうした状況にあつてヘンリーは、ウィリアム二世が残していた多くの教会上の空席を満しながら一方で強力な支持を得るために前二者の修道院長任命を行なつた、と判断されるのである。Richard of Clare がすぐ翌年には国王の命令に迅速に従わないとして修道院長職から廃位されている事実は、ヘンリーがロバートの侵攻に立ち向かうためかれの直接受封者達に提供を命じていた騎士達の軍隊にいかにも強く依存していたのかということを示すものであろう。

一方 William Giffard はそれまでウィリアム二世の chancellor であつた人物であり、ウィリアム一世あるいはウィリアム二世によつて任命された六人の先任チャンセラール達のいずれもが司教位に昇進させられていることを思い起すならば、かれのウィンチェスター司教への任命はそれほど驚くことではない。しかし、ヘンリーがウィリアム二世死後急ぎ赴いたウィンチェスターにおいて即座に William Giffard を任命した事実は、先の二人の例と同様ヘンリーが国王宮廷・行政機関からの支持を緊急に必要としていたことを示すものであろう。ヘンリー一世による宮廷出身者の高位聖職への任命にはその背後にこうした種々の動機が存在していたことが想定されるのであるが、本論に関係しては明らかに在俗聖職出身の司教達が修道士出身司教に比較して多くなつてゐた事実が指摘されるべきである。

さらに在俗聖職出身で司教になつた人々の数的増加に加えて、国王側近としての在俗聖職者の果す役割も増大しつゝあつた。例えば

中世イングランドにおける修道士と在俗聖職者(山代)

ウィリアム二世にチャブレンとして仕え後にダラム司教となつたラルフ・フランバルドの場合もそうした例を示すものである。かれはノルマンディーの Bayeux 司教区の司祭の息子として生れ、いわば社会の底辺から国王行政機構のトップへと登つた人物である。かれの国王奉仕の内容は、ウィリアム二世治世初年からまかされていた没収教会の管理行為によく示されている。かれは一〇八八年には早くも空席の Hyde 修道院の後見権 custody をもち、さらに翌年にはランフランク死後のカンタベリー大司教座を管理してゐた。この頃からフランバルドは司教空位期間中に国王の手に入るすべての教会財産に関する全般的責任をもつていたようである。一〇九七年には一六の空位司教職と修道院をその監督下においてゐる。ここからの収入は国王収入の重要な部分をなしており、国王はかれの活動のこうした部分に年に約四〇〇〇ポンドほど、すなわち国王収入全体の五分の一ほどを依存してゐたといわれる。

ところでこうした教会や修道院財産の管理は同時に修道院内部への侵入をも可能にした。例えば、自分の受封者達を支配しきれなかつたイーリーの老修道院長は略奪から自分を救うため国王裁判官達に助けを求めた。フランバルドは同修道院へ自から赴き非常に効率性を發揮してこの問題を処理してゐる。かれは修道院の全収入の一部を一人当り年約二ポンドほどの割合で修道士達に割当て、残りを修道院長のために当てた。その最大の分け前は、すぐにその院長が死にフランバルド自身が国王の代理人として支配を引き受けた時かれ自身の手に移つてゐるのである。

こうしたやり方に対して、また在俗聖職者達の一般的台頭に対しては、修道士達からの批判がなされた。カンタベリーの修道士ヒトマーは、在俗聖職者達が教会と政治において卓越し富裕になるにつれてかれらはその権威ある地位を誇り「精神において貧しき者」「素朴なる人々」すなわち修道士達を軽蔑するようになった^②と非難している。

修道士の勢力と威厳が無限のように思われた大司教ランフランクの時代以来状況は変化していったのである。ヒトマーは一二二二年大司教ラルフの死後はかれの歴史を書き続けることはなかったが、Orderic Vitalis は当時の修道士達が置かれていた状況について次のように報告している。「イングランドの国民はかつて修道士達に愛情で結びつけられていた。なぜならかれらはキリスト教への改宗を修道士達に対して負っていたからである。その結果修道士に対して常に大きな尊敬を払っていた。〔在俗〕聖職者 clergy でさえ自分達の代りに修道士達が昇進させられることに甘んじながら〔修道士達の〕品級 order に対する尊敬と好意とを示していた。しかし今や習慣と慣例は変わり、聖職者は修道士を卑しめ打ち倒すために自からの品級を前に進めているのである」^③と。

註① D. Knowles, *The Monastic Order in England*, 940-1216,

Cambridge, 1966 (1st 1940), p. 710. ノワルスは一〇六六年から

一二一五年にいたる時期のメネディクト派修道士出身の司教達を紹介しているが、本稿で取り扱っている一二三五年までに限

つてみると合計一二名が司教となっている。

② D. L. Bethell, "English black monks and episcopal elections in the 1120's," *E. H. R.*, XXXIV (Oct. 1969) [Art-Bethell, b-monks と略記する], pp. 673-698, esp. 687.

③ Knowles, *op. cit.*, 621.

④ 司教即位後ランバルドはよく組織された司教ハウスホール下をもち、世俗的要件のために二人のシェリフと教会的要件のための二人の archdeacons を置いている。R. W. Southern, "Ranulf Flambard and Early Anglo-Norman Administration," in *Do, Medieval Humanism and Other Studies*, N. Y., 1970 [以下 Southern, Ranulf と略記する], pp. 183-205, esp. 199-200. この二人の archdeacons が以前と同じく修道士出身であったのかどうかという問題は、司教が在俗聖職出身者となった際の下位者に及ぼす影響と共に、以前とは性格を異にしたがら十二世紀前半頃頭著になってくる territorial archdeacon の出現の問題(拙稿「ノルマン征服をめぐる territorial archdeacon の出現の問題」)における一考察―『イギリス史研究』二四、一九七六年、一〇―一二頁参照)とも関連させて考察されるべきであろう。

⑤ サムソンはそのチャンレン身分にもかかわらず既婚者であり司教に聖別される前日に高齢で司祭に叙品されねばならなかった。また当時の chaplain, capellanus とは、今日われわれが clerics. あるいは ecclesiastics と考える人々よりもむしろ行

政事務 civil service に携わる人々に相当してゐる。さらには
ヤールは国王のハウスホルトの持ちこしへ一部門であつたと考
えられる。そこで働く国王行政官達は、その退職に際しては種
々のレベルの聖職におつて昇進させられた。

chancellor出身司教の二人とは、一〇九四年 bp. of Lincoln
となつた Robert Bloet と一〇九六年 bp. of Hereford に任命
された Gerald であつた。Gerald は約一〇一〇年ヨーク
大司教となる。V. H. Galbraith, "Notes on the career of
Samson, bishop of Worcester (1096—1112)." *E. H. R.*, LXXX
II (Jan. 1967) [以下 Galbraith, Samson へ略記する] pp. 86
-101, esp. 86-7; cf. F. M. Powick and E. B. Fryde ed.,
Handbook of British Chronology, London, 1961, p. 81.

⑥ アンセルム死後（ヘンリー一世の残りの在位二六年間）一八名
の司教が任命されているが、その出身別の割合は八名が国王チ
ヤールあるいは書記局出身者で、五名が修道士、そして残りの
五名が司教座聖堂の高位聖職出身者であつた。カンターは後述
するカンタムリー大司教 William of Colbeil と一三二一年
bp. of Hereford となつた Robert de Bethune の二人のマン
グスティヌス派聖堂参事会員 Austin canons を修道士の中に含
めてゐる。しかしかれ自身認めてゐるように、少なくとも理論
的にはこれら律修聖堂参事会員 regular canons は修道士とで
はなく律修的〔在俗〕聖職者 regular clergy と共に位置づけら
れるべきである（かれらは少なくとも一三二三年カンタムリー

中世イングランドにおける修道士と在俗聖職者（山代）

大司教選出の時ではなく、かれらに位置づけられてゐる）。N. F.
Cantor, *Church, Kingship, and Lay Investiture in England*
1089-1135, N. Y., 1969 (1st 1958), pp. 291-2; E. J. Kealey,
Roger of Salisbury, Viceroy of England, Berkeley, 1972 [以下
Kealey, Roger へ略記する] p. 125.

したがつて Austin canons を修道士達から除外し、本稿で問
題にしてゐる修道士と在俗聖職者との関係を探つてみるなら
は、修道士出身司教の数はより少なくなるのである。

⑦ Cf. M. Rule ed., *Fadmeri Historia Noronum in Anglia*
(Rolls Series 81), 1965 (1st 1884), pp. 126-7.

⑧ C. W. Hollister, "The Strange Death of William Rufus,"
Speculum, Vol. XLVIII, No. 4 (Oct. 1973) [以下 Hollister,
Rufus へ略記する] pp. 637-653, esp. 650-1.

⑨ Southern, *Ranulf*, 186, 191.

⑩ *Ibid.*, 190.

⑪ N. F. Cantor, "The Crisis of Western Monasticism, 1050-
1130," *A. H. R.*, Vol. LXVI, No. 1 (Oct. 1960), pp. 47-67, esp.
54.

⑫ Cf. Bethell, *b-monks*, 680-1.

一、司教座をめぐる対立

修道士をとり巻くこうした状況の中で、いま本稿に関連して注目
されるのは一三二三年カンタムリー大司教選出をめぐる修道士と在

俗聖職者出身の司教達の対立である。前年ベネディクト派修道士であった大司教ラルフが亡くなっており、この年二月ヘンリー一世は後継者を選ぶための会議を開いた。その会議において司教達と、カントベリー大司教座付属修道院であったクライスト・チャーチの修道士達との間で対立が浮き彫りにされたのである。修道士達は伝統的にも修道士以外の人物が大司教になることは考えられないと主張したのに対し、司教達は自分達の上位者としてかれらと同じ背景をもつ人物を望んでいた。人数的には当時、イングランドとノルマンディーの司教達のうち二人だけが修道士出身者であったという事実も忘れてはならない。しかもその二名は病気でこの会議に出席していなかったのである。^①

ところでエドマーはすでに、修道士出身の大司教であったアンセルムとこうした世俗的司教達との間のいくつかの対立を報告していたが、アンセルム死後はその後の大司教位を修道士に継がせるべきではない、との感情が司教達の間一般的に存在していたようである。それを示すものとしては、すでに前回一一一四年の大司教選挙において司教達が国王チャペル出身のある聖職者をおしたのに対し、修道士達は Abingdon 修道院長であった Farinus を候補者として対立していた。Farinus はイタリアの Arezzo 生れでその医者としての技術はイングランドにおいて高く評価されていた。またかれは教会改革者としても知られた人物であったが国王ヘンリーはかれを支持する用意があったようである。しかしソールズベリー司教ロジャールとリンカーン司教 Robert Bloet に率いられた司教や世俗諸

侯達のいく人かは、かれの選出に激しく反対したのである。^②

司教達はグレゴリーの改革に十分精通し精神的な改革者として有名であったイタリア人を、アンセルムに続いてさらにまた大司教としてもつことを恐れていたようである。さらにかれらの反対には民族的調子さえ認められる。かれらは、りっぱな大司教は多くのすぐれたノルマン聖職者達の間にも確実に見出される、と主張しているのである。結局妥協の結果、ロチェスター司教であった Ralf が選ばれた。かれは以前ノルマンディー Sez の Saint Martin's 修道院の院長であったし、アンセルムの弟子そして友人である修道士出身司教であった。しかしすでにベネディクト戒律に従って生活することをやめていたようである。^③

司教ロジャールと Robert Bloet が大司教として在俗聖職者を本當に欲しがっていたのか、あるいは精神的なグレゴリー主義者がかれらの上位者になることを妨げるための単なる議論であったのかは、明確には決定しがたい。しかしいづれの場合でも、かれらが大司教候補者の人選をめぐって国王と意見を異にできるほどに十分自信があり、その試みが部分的にしろ成功していることは、国王に対するかれらチャンセラー出身の二人の司教達の影響力を理解するうえで注目に値するのである。

こうした前史をもちながら一一二三年のカントベリー大司教選挙は行なわれたのであった。アングロ・サクソン年代記によると先述のソールズベリー司教ロジャールとリンカーン司教ロバートは在俗聖職者を選出するための準備を事前に進めていた、と伝えられる。こ

うした司教側に対し修道士達はつぎだすべき著名な候補者をもつていなかったようである。D. L. Bethell の表現を借りれば、「修道院的秩序は激しく攻撃されており、カンタベリーの修道士達はまさにそのとりでを放棄すべく強られていた」と感じていたにちがいない。

結局、修道士達による激しい抗議と国王への嘆願によって、かれらはその中から選択すべき四名の候補者を与えられた。修道士達が選んだのはヘセックスの Saint Osyth's 修道院長 William of Corbeil であつた。かれはバネディクト派の修道士すなわち black monk ではなかつたけれども、少なくとも戒律に従つて生活していた black canon (アウグスティヌス派律修参事会員) であり、アンセルムの友人でもあつた人物である。

この選挙に関連しては、つぎの二点が注目されるべきである。すなわち、まずカンタベリー選出大司教ウィリアムがかれを聖別することを主張したヨーク大司教 Thurstan に、自分を全イングランドの首位司教として聖別するよう要求していることである。しかしこれは実現せずウィリアムはロジャーを含むかれの属司教達によって聖別された。イングランドの首位司教座をめぐるカンタベリーとヨークとの間の論争はそれ自体非常に重大な研究テーマである。しかし本稿に関連しては、つぎの事実が指摘されるべきであろう。ヨーク大司教サースタンは司祭でもあつた Ansgar, canon of St. Paul's の息子であり、かれ自身も同所の聖堂参事会員であつた。さらにかれはウィリアム二世のハウスホール中の寵愛されたメン

中世イングランドにおける修道士と在俗聖職者(山代)

バーであり、ヘンリー一世時代には国王のチャンレンとして仕えていた。このように Thurstan, abp. of York & Roger, bp. of Salisbury と共にヘンリー一世と非常に緊密な関係にあつたといふことである。

つぎに一一二三年のカンタベリー大司教選挙に関連して注目すべき第二点は、このイングランドにおける大司教の選出がローマ教皇庁において問題にされ、結局前年成立していたウォルムスの協約に基づく教皇の態度決定により是認されている、といふことである。ウォルムスの協約は司教選挙が皇帝の面前で行なわれることを認め、さらにもしその選挙が紛糾した場合には、皇帝は司教集団のより分別ある(年老いた)メンバー達の意見に従うべきであると規定してゐた。教皇カリストゥス二世はこうした協約に基づいて、ウィリアム選挙の問題点すなわち国王宮廷においてそれが行なわれたことを是認し、さらにかれは国王ヘンリーが大司教選出にあたりかれの司教達の助言に耳を傾けたと主張できる、と判断したようである。④ こうして教皇は自己の約束における誠実さを示すものとして、さらにおそらくは E. J. Kealey の主張することく、イングランド国王ヘンリーの養理の息子であつた神聖ローマ皇帝ハインリヒ五世への好意として、このイングランドの新しい大司教を認めたのであろう。このようにしてカンタベリー大司教の選出というきわめてイングランド教会独自の問題が、この時期においてローマ教皇庁とのかかわりの中で取り扱われ始めている事実が注目されるのである。それではこの大司教選挙において在俗聖職出身司教達とクライス

ト・チャーチ修道士達によつて、いわば妥協的人物として選出された William of Corbeil とはどのような人物であつたのであろうか。William of Malmesbury は、かれを選んだ在俗聖職者達の多くが、自分達のより自由な嗜好にとつてかれがあまりにも質素で禁欲的であつたがゆゑに失望させられた、と報告している。このことに関連しては在俗聖職者達が大司教選出に臨んで修道士出身ではないく自分達と同様の背景をもつ司教を希望してゐたことが想起されるべきであらう。

William of Corbeil は一一一八年には Holy Trinity, Aldgate におけるアウグスティヌス派参事会員であつた。かれはそれ以前にすでにカンタベリー大司教ラルフを知つており、一一一六年から翌年にかけて行なわれた大司教によるローマ旅行に Herbert, bp. of Norwich や Hugh, abbot of Chertsey と共に加わつてゐる。Hugh the Chanor による^⑧かれは当時 St. Martin's, Dover における参事会員 canon であつたようである。したがつてその後この時期非常に愛好され大いに宮廷に氣に入られていた Holy Trinity, Aldgate に入つたことなり、さらにそこから St. Osyth's, Essex の修道院長となつてゐた。こうした経歴をもつウィリアムはカンタベリー大司教アンセルム、次代大司教ラルフ、また Alexander, bp. of Lincoln によつて Elmer, prior of Christ Church, Canterbury と密接な関係をもつてゐた。^⑨

さらにウィリアムに関する人的結びつきと共に注目されるのは、かれがダラム司教ラヌルフ・フランバルドの子供達の教育を託され

て一一〇七年・一一〇九年頃にかれらを Laon へと連れていつてゐる事実である。Laon はこの時期きわめて愛好されており、一一二〇・一三〇年代のアングロ・ノルマン司教達の多くが同所で訓練を受けてゐる。ウィリアム自身は一一〇四年から一一一六年までそこに滞在してゐたことが知られてゐるが、かれの他には Alexander, bp. of Lincoln (1123-48), Nigel, bp. of Ely (1133-69), Robert, bp. of Hereford (1131-48), Robert, bp. of Exeter (1138-56) 等が Laon で教育されてゐた。これらの司教達はすべて高く位置づけられる聖職の縁故関係をもつ人々であつた。まさにこのことは当時のイングランド教会において高位聖職を獲得するためには、北部フランス生れであるかそこで教育されてゐることが依然として有利であつた、という状況を端的に示してゐるのである。

カンタベリー大司教になつてからのウィリアムはヨーク大司教との間でイングランド首位司教座をめぐる対立してゐるが、本稿に関連して注目されるのはかれとカンタベリー大司教座付属修道院クライスト・チャーチの修道士達との間の対立である。一一三一年國王ヘンリーはかれに St. Martin's, Dover を与えたが、ウィリアムはそこに Merton から一人の修道院長と一〇人の聖堂参事会員達を導入したのである。この導入に対してはクライスト・チャーチの修道士達が反対した。Gervase of Canterbury によれば、大司教の一^⑩一一三六年の死はこの事件によつて引き起された怒りが原因であつたといわれるほどの状況であつた。その後修道士達はこれを没収して保有してゐる。^⑪この事件について指摘されるべきことは、聖堂参事

会員出身であったウァリアムが、以前にかれが所屬していたとされる St. Martin's の自分と同じ canons を導入したという事実がある。ウァリアムを擁出した在俗聖職者達の多くがかれの質素な禁欲性に失望させられたことは先述したが、同時に修道士達にとっても自分達の上位者であるウァリアムは必ずしも十分に修道士達の要求を実現していったわけではなかったと想定されるのである。

- ① Bethell, b-monks, 674; Kealey, Roger, 126-7.
- ② Bethell, *Ibid.*, 675; Kealey, *Ibid.*
- ③ Bethell, *Ibid.*; Kealey, *Ibid.* 128; Cf. Cantor, *Church, Kingship*, 303-9.
- ④ Kealey, Roger, 129.
- ⑤ B. Thorpe ed., *Anglo-Saxon Chronicle*, 2 Vols. (Rolls Series 23), 1964 (1st 1861), II, p. 218.
- ⑥ Bethell, b-monks, 676. 400と1111年と生存したインマンラン、ウォールズ、ノルマンビーと並び11名の司教座のなかからこの一因を占めつつの国田チャイルの聖職者達であり、他7名のなかで Ernulf of Rochester のみがイングランドに同教座をめぐり争ひあつた。Bethell, *Ibid.*, 674.
- ⑦ Bethell, *Ibid.*; Kealey, Roger, 132.
- ⑧ Kealey, *Ibid.*, 133; Hollister, *Rufus*, 648; D. Bethell, "William of Corbeil and the Canterbury-York Dispute," *Journal of Ecclesiastical History*, 19 (Oct. 1968), [Cf. Bethell,

中世イングランドにおける修道士と在俗聖職者 (山代)

William の略記(下) pp. 145-159, esp. 151. Thurstan について Cf. C. Johnson, *Hugh the Chantor: The History of the Church of York 1066-1127*, London, 1961, pp. 33 ff.

- ⑨ ケンリーはこの協約の詳細を知っていたと考えられる。ながら協約のコピーがインスマントに送られてきていたからである。ただし Ralpin, abp. of Canterbury & Thurstan, abp. of York を含む1113年インスマン公会議の召集されたケンリーの人々に対してそれが送られた。Cf. Bethell, b-monks, 678.
- ⑩ Bethell, b-monks, 678-680; Kealey, Roger, 29-31.
- ⑪ Cf. C. Clark, *The Peterborough Chronicle 1070-1154*, Oxford, 1970 (1st 1958), p. 86.
- ⑫ Johnson, *Hugh the Chantor*, 50.
- ⑬ Bethell, William, 149-50, 154.
- ⑭ *Ibid.*, 146, 150, 147 n. 1.
- ⑮ J. Le Patourel, "Norman succession 996-1135," *E. H. R.*, 86 (April 1971), pp. 225-250, esp. 248. ヘルローザ、ケンマール一世はインスマン人を決して修道院長たしなむべきでなく考えつた。Eadmeri *Historia Novorum*, 224. 400と1111年と司教座の大多数はノルマン出身を占めていた。Le Patourel, *Ibid.*, n. 7.
- ⑯ しかしこの譲渡は大司教とライヌスト・チャーチ修道院の両者に対してなされたことが1113年四月二十九日ウエストミン

マスターでさう確認をされているのである。C. Johnson and H.A. Cronne ed., *Regesta regum Anglo-Normannorum*, | Oxford, 1956, II. No. 1736.

⑮ Cf. W. Stubbs ed., *The Historical Works of Gervase of Canterbury* 2 Vols. (Rolls Series 73), London, 1965 (1st 1879-80), I, pp. 96-101.

⑯ Bethell, William, 151, n. 1.

三、在俗聖職者の台頭と修道士

これまでは主としてカンタベリー大司教選出過程の分析を通じて、司教座をめぐる十一世紀末から十二世紀前半の修道士と在俗聖職者達との関係を見てきた。ここには、国王ウィリアム二世の側近として活躍した Samson, bp. of Worcester と Ranulf Flambard, bp. of Durham とロブレンリー一世に仕えた Roger, bp. of Salisbury に焦点をあてて、この時期の在俗聖職者達の果していた役割を明らかにする。さらにそうした状況の中で修道士達が直面した問題を検討することにより、当時のイングランド教会の実態の一端を明確にしたい。

ウィリアム二世がかれの統治期間中に五つの主要な聖職者の任命を行なっていたことは既述した。そのうちの二人が一〇九六年にウイスター司教になったサムソンと一〇九九年にダラム司教位を与えられたフランバルドである。かれら二人は共にチャブレンとして国王に仕えその報酬として司教位を与えられた、と考えられるのであ

るが、より具体的には国王に対するかれらの奉仕内容はこのようなものであったのであろうか。かれらの経歴をたどりながら当時の在俗聖職者が司教に昇進するまでの過程を跡づけてみたい。

サムソンは世俗的嗜好・習慣とすばらしい縁故関係をもぎ、十分に教育された寛大で裕福な人物であった。かれの兄弟 Thomas of Bayeux はかつてのヨーク大司教であり、現在の大司教 Thomas二世はかれの息子であった。またもう一人の息子 Richard は bp. of Bayeux となっていたのである。さらに自からは Marbod, bp. of Rennes や Ivo of Chartres の友情を得ることができるほどの徳性をもっていた。しかしそれは修道士のもつような徳性ではなかった。このことは、サムソンがかつて自分は来世的人間ではなくむしろ現世的人間であるとして、ウィリアム一世からの Le Mans 司教位を拒絶していた事実からも明らかである。

サムソンは十一世紀中頃ノルマンディー Douvres の生れであり、Odo, bp. of Bayeux の被保護者 protégé として教育を受け監督されていた。そして、オドによって Bayeux 聖堂参事会員・財宝物係 treasurer とされている。さらにオドからは Somerset における Templecombe トナーを与えられたりしているが、サムソンはオドから国王ウィリアム一世へとその務めを変えていったようである。国王証書に連署人として現われるようになり、ウィリアム一世はかれに対して Wokerhampton における St. Mary 教会を譲渡したりしている。サムソンはつぎにウィリアム二世にチャブレンとして仕え前王に対してと同様の働きをなしていたと考えられる。かれの役割の内

容はいかなるものであったのか、という疑問が想定されるのであるが、それが後年にはウースター司教位を得るのを可能にするほどのものであったことが理解される。V. H. Galbraith の示唆するところによれば、サムソンはドゥームズデイ・ブック編纂に深く関わっていた人物であると考えられるのである。

サムソンのウースター司教への任命についてさらに注目されることは、ウィリアム二世がその直前にウースター司教の陪臣達 *noberdenants* から直接に相統上納金を強要していたという事実との関連である。こうしたスキャンダルの行動によって引き起こされた苦しい状況にあって、司教に任命されたサムソンはその職位のための選り抜きの人物であったと考察される。サムソンがかつて、ウィリアム一世による司教任命を拒絶していたことを考えあわせるならば一層かれの任命の意味が重大であった、との判断がなされるであろう。こうしてウースター司教位がサムソンの国王に対する働きの報酬であったことは容易に理解されるところであるが、同時に国王はかれに對し先のような要求を実現させることを期待していた、と推定されるのである。

それではサムソンに続いて一〇九九年ダラム司教となったラヌルフ・フランバルドの場合ほどのような国王奉仕の内容をとっていたのであるうか。国王証書はかれを *capellanus regis* と呼んでいる。確かにこの称号は正当であり、かれは国王チャブレン達の一人であった。一〇九一年一月ウィリアム二世のハウスホルドのメンバー表は、十一人のチャブレン達のうちフランバルドに第九番目の地位

を与えている。しかしすでに一〇九三年九月までにはかれはチャブレン達の最高位へと達していた。この日以降かれの名前はひんばんに国王令状に現われるようになる。こうしたフランバルドについて、内部関係者達はかれがもはや単なるもう一人のチャブレン *chaplain* ではないということを知っていた。かれは「国王のチャブレン the King's Chaplain」であった。歴史家 Geoffrey Gaimar はつぎのような情景を伝えている。Le Mans での反乱の知らせを伝える手紙が到着した時フランバルドは国王ウィリアム二世の側に坐っていた。国王はその手紙を受け取り封印を破って、それを読むようにとフランバルドに手渡している。この描写が示唆するのは、フランバルドがまさに国王の右腕の人物でありすべての物事を国王の要求に合うように取り計らっていた、ということである。

フランバルドがウィリアム治世初期から没収された教会・修道院の管理を任されてきており、そこからの収入は国王の収入全体の相当大きな部分をなしていたことは既に指摘してきた。国王のためのこうした役割に加えてフランバルドはイングランド全体の統治を任されることもあった、ことが注目される。ウィリアム二世は自分がイングランドを離れる時その行政監督を数人の国王側近達に委託している。たとえば一〇九七年から一〇九九年まではさきの国王チャブレンであった *Walterin, bp. of Winchester* とフランバルドが摂政であった。さらに一〇九九年ダラム司教となってからもフランバルドは *Haimo the Steward, Urso de Abitot* と共にその任務を携わっているのである。ラヌルフ・フランバルドによってなされた国

王のためのこのような働きに対して、ウィリアム二世はかれにドラマ司教位を与えたのである、と考えられる。

ウィリアム二世の右腕としてのサムソンやフランバルドと同様にヘンリー一世の側近として重要な働きをなしたソールズベリ司教ロジャークは、元来ノルマンディーのCaen近くにある小さなチャペルの司祭であった。未来の国王ヘンリーによって登用されたロジャークは、ほとんど無教育であったにもかかわらず機敏で熱心であり執事としてその手腕を発揮した。ヘンリーが国王になってから、かれは一一〇一年国王の *chancellor* になっている。さらにフランバルド同様ロジャークも、国王ヘンリーがノルマンディーへ行って留守の間イングランドの統治をまかされるほどの重要な役割を果たしていたことが注目される。

国王に信望の厚い側近としてのロジャークは他の人々のために国王へのとりなしをすることもあった。例えば一一二一年、かれは統治の仕事においてかれの同僚であり *Surrey, Cambridge, Huntingdon* の有力なシェリフであった Gilbert のために働いている。ギルバートはサリーにアウグスティヌス派の *Merton* 修道院を建てたが、その特権と基本財産を確認する国王証書を要求していた。かなりの金銭的贈与の申し出にもかかわらずヘンリー一世はシェリフの嘆願を延していた。かれはギルバートを好いていたようであるから、その原因として考えられるのは、おそらくより多くの金を期待していたということであろう。ロジャークはギルバートのために国王にとりなし、修道院の特権を確認する国王証書を取り付けるのに成功して

いるのである。^⑨

大司教選出においてみせた修道士達に対するロジャークの態度は決してかれらに好意的なものではなかったことは先に述べたが、しかしそのことは、かれがすべての律修聖職者に対して敵対的であったということの意味するものではない。むしろそれとは反対に、ロジャークは *regular canons* あるいは *black canons* と呼ばれるアウグスティヌス派律修参事会員達を積極的に支援しているのである。ヘンリー一世の統治期間だけで四三のそうした律修参事会員達の教団が建設されているが、*St. Batholomew's* や *ロンドン* の *Holy Trinity* を含めてそれらのいくつかはロジャークによって物質的に援助されていた。^⑩

なかでもソールズベリ司教ロジャークが最も深く結びついていたのはオックスフォードの *Saint Frideswide's* の参事会員達であった。この地には十一世紀初期には在俗の参事会員達 *secular canons* が定住していたが、一一一一年頃ロジャークはこの在俗の団体 *secular college* を律修的修道院 *regular priory* に転換させる計画を始めている。それは一一二二年ヘンリー一世の支援を受けながら、*ロンドンの Holy Trinity* からの律修参事会員達がやってきてかれらの修道院長に *Guimund* がなった時に完了したのであった。^⑪ *Guimund* は学識深い人物でありかつての国王チャブレンであった。同時に独立的性格をもつ人物でもあり、ある報告によると国王ヘンリーが聖職者の昇進のために無学な人々をより好んでいるとの不満を述べながら、自から無学であるふりをしてみせたと伝えられる人でもあっ

た。こうしたかれの性格は、カンタベリー大司教選挙において国王が支持した候補者にあえて異を唱えたロジャリーの自信と合わせ考えると、当時の国王に近い俗聖職者達についての一面を知る上で大変興味深い。

戒律に従って共に生活するこのような律修聖職者達は別としても、一般的な俗聖職者達と修道士達との関係はどのようなものであったのであろうか。そうした関係を示唆するものとしては、イリー司教座付属修道院の例がある。ソールズベリー司教ロジャリーの甥であった Nigel は一三三三年空位であったイリー司教位を國王から与えられたが、かれはすぐにそれまで従事してきていた國王の財務府長官 *treasurer* としての職務に再び専念し始め司教位には代理人をおいた。この代理人は *Ranulf of Salisbury* という名前の既婚聖職者であったが、かれは司教座聖堂付属の修道士達をひどく抑圧したといわれる。そして司教である Nigel はそうした修道士達をすばやく保護することはなかったのである。

先述のカンタベリー大司教選出に関連してアングロ・サクソン年代記作者は、司教達が在俗聖職者出身の大司教を希望していたし、かれらは常に修道士やその支配に反対していた、と述べている。しかしソールズベリー司教ロジャリーについてはこうした事情が少々違っているように思われる。たしかにかれは自分と同じ種類の在俗聖職者を昇進させたがっていた。しかし *E. J. Kealey* が主張するごとく、つぎのような解釈もまた可能であるように思われるのである。すなわちロジャリーはかれ独自の改革理念をもっていた、という

中世イングランドにおける修道士と在俗聖職者（山代）

ことである。ロジャリーがアウグスティヌス派律修参事会員達を支援していたことは先に見たとおりであるが、かれはまた修道士達はかれらの修道院内部に所属するのであって王国中の権力ある座〔司教座〕のうちにいるべきではない、と信じていたのではないか。いわばかれは古いスタイルの前グレゴリー改革者 *pre-Gregorian reformer* であり、修道院は援助されその規範が維持されるべきであるが、修道士達はかれらの修道院内部に留まらなければならぬ、と主張するものであったと想定されるのである。

それではロジャリーをしてその規律が維持されるべきであると考えさせたような、当時のイングランドにおける修道院の実態とは一体どのようなものであったかという問題が提起されるであろう。例えば一三二三年（ヘンリー一世によって建てられた Reading 修道院のように、クリエニー的改革という新しい方向をたどっていた修道院が存在していたことは確かである。しかし一方で、*Canterbury*, *Malmesbury*, *Peterborough*, *Bury*, *Worcester* 各修道院のように古く保守的な修道院も存在しており、それらは旧来からの伝統や地方的特権を強調したりしていた。現存する史料の多くがこうしたより保守的な修道院の修道士達の手になるものであることは、当時の修道院の実態を理解しようとする際に気をつけなければならない点であろう。

一三二五年カンタベリーにおいてなされたと考えられる *Bath* 司教 *Godfrey* の説教は、確かに修道士である聴衆に対して向けられている。それは当時の司教から修道院に対してなされた最も力強い

攻撃を示すものとして非常に興味深い。かれはまず修道士であるとはどういうことであるのかと問い、つづいてそれは、ねたみ、法廷で争い、誇り、偽りの誓いを犯し、偽証をなし、この世の事物を獲得するためアルプス山脈を越える(すなわちローマ教皇庁へ赴く)ことに急であることなのか、と詰問している。これは当時の修道士達の実態の一端を示唆していると理解されるのである。

さらに十二世紀前半イングランドにおいて在俗聖職者達から修道士に対してなされた攻撃は教会改革の問題とも関連していたと考えられる。それはただイングランドのみではなく大陸においても問題にされた、修道士の司牧権に対して向けられたのである。一一一九年まで Norwich 司教であった修道士出身 Herbert Losinga は、修道士としての天職を弁護する論文を書くよう依頼された時、修道士も在俗聖職者も共に司祭 priest でありしたがって同じ威厳を共有している、と言明しながら、その依頼を拒絶したのであった。^⑩しかし今や、まさに修道士の果してきたそうした司祭的役割そのものが在俗聖職者から問われることになったのである。こうした状況は大陸においても認められ、一一〇〇年 Poitiers、一一一四年 Gran、一一二四年 Poitiers での各会議そして一一三三年の Lateran 公会議はすべて、修道士による教区 parish にかかわる仕事を禁ずることになったのである。^⑪この問題との関連においてみれば、先述したロジャールの主張すなわち修道士達は規律を維持しながら修道院内

部に留まるべきであるとの見解は、修道士が司教座に就くことを戒めたばかりかかれらの司牧権さえも規制している、と考えることができるのではあるまいか。

他方、教会改革との関連において在俗聖職者達のかかえていた問題を見てみると、強調されるべきはかれらの結婚問題である。またその結果当然生ずることになる縁故者起用 nepotism の問題は、かれらと司教座を争っていた修道士達との関係においても少なからぬ影響を与えていたであろうがゆえに一層注目に値するのである。

この時期イングランドにおける在俗聖職者あるいは司教達の非常に多くが、ノルマンディーにおける、またノルマン征服後イングランドにやってきていたノルマン諸侯に仕えるチャブレン家系の出身者達であった。すでにラヌルフ・フランバルドが司祭の息子であったことは述べたが、かれ自身は少くとも五人の息子をもっていたようである。そのうちの三名がリンカーンや St. Paul's の聖堂参事会員あるいは主任司祭となったりしているのである。さらにかれの甥達のうち一人はダラムのシェリフ、もう一人は Northumberland の司教座聖堂助祭 archdeacon になっている。ウースター司教サムソンが前後二人のヨーク大司教と兄弟・親子関係で結ばれていたことも既述したところである。さらに本稿で扱った三人目のソールズベリー司教ロジャール自身そうした司祭の父親であった。またロジャールは一一二三年かれのオイである Alexander がリンカーン司教位を受け取れるよう取り計らっている。アングロ・サクソン年代記作者はこの時期のロジャールの活動をひどく批判しながら、アレクサ

ンダーがまったくロジャリーの愛情ゆえに司教に選出されたことを伝えていゝ。さらに一一三三年にロジャリーの甥ですてに国王の財務府長官であった Nigel に対し国王がイリーリ司教位を与えたことにおいても、国王に対するロジャリーの働きかけがあったことが予想されるのである。

一一二五年にイングランドにやってきた教皇使節である枢機卿 John of Crema はロンドンにおいて直ちに教会会議を召集し、一一二三年ラテラン公会議の決定にならって聖職者達の結婚が解消されるべきであることを厳格に命じている。しかし、すでにそうした教令はヘンリー一世治世の間すべての会議において公布されてきていたにもかかわらず、聖職者の結婚と内縁関係はなかなか消滅していなかったのである。

こうした聖職者の結婚の問題が、とりわけ息子達をもつにいたった在俗聖職者達において相対的ではあれより著しいものであったとすれば、縁故者起用を行ないたいとする誘因も在俗聖職者達において一層強く働いていたのではないかと考えられる。もしそうだとすればこのような背景をもつ在俗聖職者達であるがゆえに、おそらくはかれらの立場をより深く理解してくれるであろう同様の背景をもつ在俗聖職者出身の司教・大司教を一層強く求めていたのであると想定されるのである。こうして本稿の前半で検討された司教座をめぐる修道士と在俗聖職者達との対立関係も、イングランドのみならず大陸においても当時遂行されつつあった修道士の司牧権問題、さらに聖職者の結婚を含む広範な教会改革との関連において把

握されることによつて、その実態の一端が明らかになったと、考えるのである。

註① R. W. Southern, *Saint Anselm and His Biographer*, London, 1963, p. 140.

② Galbraith, Samson, 93.

③ *Ibid.*, 187-8. これは canons によつて仕えられた国王チャールズである。ウイリアム一世の譲渡によつては、*Cf. Regesta regum Anglo-Normanorum*, I, Appendix No. 26.

④ Galbraith, Samson, 88.

⑤ *Cf. Ibid.*, 93.

⑥ Southern, Ranulf, 185, 195.

⑦ *Ibid.*, 185. こうしたフランバルドの地位に関連して注目されるのは、その地位に伴ういわば二重の役割ゆえの強さである。例えばフランバルドは Theford 司教の所領に関して一度は国王のために訴訟を開始しその判決において国王への帰属を認めさせていた。すなわちそこでは国王の主張を押しつける代理人であった。しかし後年にはこの土地を司教に回復すべきであることを Norfolk と Suffolk のシェリフに命じた国王令状が出されている。そこにおいて当該司教を国王訴訟の結果から解放したところのこの国王令状の唯一の証人もまたフランバルド自身であったのである。サザンの表現を借りれば、まさに「かれは獵犬〔シェリフ〕達を駆ることも、また随意に呼び戻す〔手

Monks and Secular Clergy in Medieval England

by **H. Yamashiro**

In the eleventh and the twelfth century England, as the secular clerics began to play the roles of curial advisors for the kings, they could raise their rank, and could challenge the previously leading positions played by the monks. After the Norman Conquest of 1066, there appeared several ecclesiastics who played remarkable roles in their relationships with the kings. Presumably, there were two groups among them. One was represented by the monk bishops such as Lanfranc and St. Anselm. The other group of bishops, who were for-

merly secular clerics, included Ranulf Flambard, bishop of Durham, who as a royal chaplain served William II, and Roger, bishop of Salisbury, who as a chancellor worked for Henry I.

In this article, in order to clarify the contemporary historical situation in which the monks and the secular clergy were placed during the late eleventh and the early twelfth centuries;

- (1) Their competitive relationships for some bishoprics were proved, for example, by discussing the election of the Archbishop of Canterbury in 1123.
- (2) The roles of the secular clerics who had been appointed bishops after their service as the royal attendants were examined.